

教育実践報告

# 学級通信の教育的効果とその意義 —生活ノート連動型学級通信の実践事例—

岸田 幸弘・吉岡 典彦

The Educational Effects of Classroom Newsletters and Their Significance:  
A Practical Case Study of Classroom Newsletters Linked to Student Diaries

KISHIDA Yukihiro and YOSHIOKA Norihiko

## 要 旨

本事例は、生徒の生活ノートと連動した学級通信を発行し続けている中学校教師の実践を詳細に分析し、一つの事例として検討することを通して、改めて学級通信の役割と作成の視点を明らかにした。生徒・保護者・同僚職員のアンケート調査から、生徒の文章表現力を高め、担任教師と生徒との信頼関係を築き、生徒同士の仲間意識を醸成することをねらいとした生活ノート連動型学級通信は、先行研究で指摘されている「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」「子ども同士の信頼関係」を構築するツールとして機能していたことが示唆された。

## キーワード

学級通信 生活ノート 学級経営 織物モデル

## 目 次

- I. 問題と目的
- II. 生活ノート連動型学級通信の実践事例
- III. 生活ノート連動型学級通信に対する質問紙調査
- IV. 全体考察
- V. 今後の展望

文献・参考

## I. 問題と目的

公益財団法人理想教育財団は、一般教諭、管理職、保護者を対象としたアンケートを行い、さまざまな点から学級通信について検討し、「学校における各種通信の実態と教育における調査研究」(2018)<sup>1)</sup>として報告している。それによれば、学級通信を発行している教師は77%にのぼり、担任と子どもたちや保護者とのコミュニケーションツールとして、その中心的な役割を果たしているとは指摘している。学級通信の発行は、教師の職務として義務づけられているわけではない。にもかかわらず、約8割弱の教師が発行していることからみて、多くの教師は学級通信の役割や教育的意義を意識し、学級経営等の教育活動に生かそうとしているものと思われる。

先行研究においても、学級通信の役割と意義について報告されている。鈴木(2012)<sup>2)</sup>は、学級経営の充実に大きな役割を果たす学級通信を創り出すには、「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」などの意図を明確に意識することが重要であると述べている。また、学級通信が学級経営を充実させるために大きな役割を果たすと考えている教師は、ただのお知らせや抽象的な子どもの様子ではなく、できるだけ具体的な子どもの姿を伝える努力をすると指摘している。成井は(2011)<sup>3)</sup>、学級集団育成に大きく関与する学級通信の役割として、「学級経営方針の発信」「児童理解の深化」「支持的な学級風土の醸成」「家庭との連携の強化」の4つを指摘した上で、学級通信を通して個々の学級担任が学級経営をオープンにする「開かれた学級通信」を提案している。山本・赤坂は(2016)<sup>4)</sup>、学級通信を通して子どもが教師から認められたり、さまざまな活動への価値づけが継続して行われたりすることで、教師と生徒との信頼関係を維持していく可能性を示唆している。さらに小坂・赤坂は(2018)<sup>5)</sup>、小学校において児童の良さを伝える学級通信を継続的に発行する意義として「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」に加えて、「子ども同士の信頼関係」の構築の効果を加えている。このように学級通信には、学級担任の学級経営方針や具体的な子どもの姿を発信することで、支持的な学級風土を醸成し、「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」「子ども同士の信

頼関係」を構築するツールとして活用されてきている。

これらの論調を支持するように、鈴木(前掲)は単なるお知らせや抽象的な子どもの様子を発信しても教育的な効果は期待できないと指摘し、吉川(2004)<sup>6)</sup>も連絡など単なる情報伝達の道具ではなく、ズレをはらみながらも結びつきあうダイナミズム、つまり関係づくりに学級通信の本質があると述べている。さらに佐藤(2020)<sup>7)</sup>は、教職経験年数によって学級通信の内容に特徴があることを指摘し、5年以下の教師は「お知らせ」を一番多く書いているのに対して、11年以上の教師は「学級全体の様子」を優先的に書き、21年以上の教師は「教師の教育観」を書く内容として選んでいると述べている。それぞれの教職経験年数を重ねる中でより効果的な学級通信を目指した結果、単なる情報伝達の道具から脱皮し、それぞれの教師の目的に即した学級通信へと変貌を遂げていく実態を指摘している。これらの指摘は、教師の成長とともに学級通信を発行する意義そのものが変容していることを意味していると思われる。

そこで本稿では、第2筆者が「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「子ども同士の信頼関係」の構築を目指して実践した学級通信の事例を詳細に振り返り、生徒や保護者等からの学級通信についての質問紙調査の結果を参考にしてその教育的意義を探るとともに、一般的な学級通信発行の教育活動を改めて問い直すものである。

## II. 生活ノート連動型学級通信の実践事例

本事例は20XX年度の1年間に、第2筆者(以下、A担任)が中学校3年生の学級担任として、毎日発行した学級通信「ひとりだち」(No.1号～243号)の実践記録である。

### 1. 学級経営における学級通信の位置づけ

A担任は中学校の理科教員として37年の経験を持ち、その間に延べ30年間、学級担任とシラスを受け持ち、学級通信を学級経営の大きな柱と位置づけ、日刊で学級通信を発行してきた。これまで発行してきた学級通信では、佐藤(前掲)が指摘しているよう

に、教員経験が浅い時にはいわゆる「お知らせ」や「連絡事項」を中心に掲載してきたが、教員経験が重なるにつれて「教師の教育観」を中心に書くようになってきている。現在は連絡事項などを一切書かず、生徒の生活ノートの内容を中心に掲載し、そこに教師の思いや考えを語りかけていく学級通信のスタイルになっている。小倉(1989)<sup>8)</sup>は、中学校において教師の語りかけを綴っていく学級通信を学級づくりの1つの柱とした実践を報告し、教師が生徒に理解されていく(教師理解)ためには、生徒の側に入り込みながら教師の考えを表現していくということが大切であると述べている。吉岡(2015)<sup>9)</sup>は、学級内の生徒同士のメッセージを交流させるための手立てとして、日常的かつ継続的に教師が行っていくことができる方法の1つとして学級通信を取り上げ、中学2年担任のT教諭(教職経験19年目、40代)の学級通信を分析している。生徒の生活ノートの記録をそのままコピーしたものを材料とした同じスタイルの学級通信を毎日発行することが、生徒に安心を与える空間(場)を生み出していると指摘している。

A担任の現在の学級通信のスタイルは、吉岡(前掲)が研究対象としたT教諭の学級通信の構成と類似している。ただし、生徒の生活ノートへの記述をそのまま学級通信に記載している点は同じであるが、その日に提出された生徒分すべてを掲載してはいない。なぜならば、A担任は生徒に「生活ノートは毎日提出する」ことを要求しているからである。そのため、掲載する生活ノートの内容は、A担任がその日に選択した生徒の分だけであり、掲載された生活ノートをきっかけとして生徒に語りかける形式になっている。寺本(2010)<sup>10)</sup>は、学級通信の機能は保護者への通信という機能にとどまらず、書く、発表する、発信することを通して、他者を意識し、自分自身を再発見させることができる機能を有していると考えられると述べている。A担任の学級通信は、生徒の生活ノートと連動している。生徒に生活ノートを毎日書かせ、生徒の書いた文章を学級通信で発表し、発信させる。生徒の発信を出発点として担任教師の語りかけをつなげていく。この学級通信のスタイルで、「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「子ども同士の信頼関係」の構築を目的としている。

## 2. A担任の学級経営の理念と織物モデル

生徒の生活ノートと連動した学級通信「ひとりだち」(以下、本学級通信)は、A担任が3年生から受け持った学級での1年間の実践である。このクラスは3年生のスタート時から教室に入れない生徒が複数人いる状況で、A担任からは学級内に小集団が乱立している状況に見えた。また、初めての出会いの場でのA担任の第一声は「どうして時間通りに学活が始まらないのか」といった指導的な一声だった。つまり時間のけじめや提出物にルーズで、集団としてのルールが十分には定着していない様子が見えたのである。そこで、①日々の当たり前を圧倒的なレベルで実現できる生徒、②周りの仲間たちと豊かにつながり行動しようとする生徒、の育成を学級経営の柱に据え、生徒たちにとって居心地のいい、安心できる学級集団づくりをめざした。そのためには、A担任自身が生徒とつながり、生徒同士をつなげていく必要があると考えた。

野中・横藤(2011)<sup>11)</sup>は、集団を安定させ豊かな実践を展開できる学級経営のモデルとして「織物モデル」を提案している。まず「教師と子どもとの上下関係」という縦糸を張り、その上で「教師と子どもとのフラットな心の通い合い」という横糸を絡めていく、という考え方である。A担任はまず、生活ノート全行書き、あいさつ・返事、時間のけじめ、給食時の全盛全食、清掃への取り組みを学校生活の枠組みとして示し、徹底していくことから縦糸を張り始めることにした。そのために、上記5つのことを大事にする理由について話をし、実行させた。その上で、提出された生活ノートに丹念にコメントを書いて生徒の頑張りに応えるとともに、上記の枠組みをつくらうとしている行動や、友だちや学級のためになる行動を取り上げ、認めていくことで横糸を張り、さらには生徒同士のつながりというさらなる横糸を巡らせていこうとした。

また、中学校生活最後の年にいきなり学級担任となり、保護者の中には不安を抱いた人もいたと思われる。そのため、A担任が考えていることや実際に行っていることを保護者に知っていただき、不安を解消することとした。A担任の思いや考えを伝え続けること、友の思いや考えを伝えることによって、生徒個人の成長や学級の集団としての成長と保護者

との関係構築を目指したわけである。織物モデルの発展的実践と保護者への連携の手立ての1つとして、日刊で本学級通信を発行したのである。

### 3. 生活ノート連動型学級通信の特徴

#### 1) 学級通信の構成

本学級通信の主役は、生徒の書いた生活ノートである。生徒の生活ノートへの記述をそのまま記載して学級通信を構成している。前日に提出された生活ノートの中からA担任が選択したものを載せ、その生活ノートを出発点としてA担任が伝えたいことを「陰の声」として語りかけている。生活ノートという生徒の声を中心に編集することで、学級集団とその集団を構成する生徒たちの様子が、読み手によりリアルに伝わるのではないかと考えている。あくまでもA担任の語りかけはつぶやきであり脇役にすぎない、というスタンスである。そのためA担任の言葉を「陰の声」と表現し、一人称で書いている。そしてA担任の語りかけであることをはっきりさせるため、あえて主語は「私」ではなく「YOSHIOKA」を使っている。

#### 2) 発行頻度と本学級通信のレイアウト

本学級通信は毎日発行することを原則としている。それゆえ作成時間の短縮のためにサイズをA5判片面とし、内容は生徒1人の生活ノートからの抜粋を破線で囲んで紹介し、その内容に関するA担任の語りかけである「陰の声」をつけ、その日の話題に沿う言葉やセンテンスを生活ノートの中から選んで表題とし完成させる。行数を36行ほどに設定することで、時間的な負担を軽減している。イラストや写真は掲載しないが、学級開きの時にはドラマ「遺留捜査」で上川隆也が演ずる主人公・糸村聡風に「毎日、私に3分間時間をください。」とアピールするなど、本学級通信に対する保護者のモチベーションを高めようと工夫している。A5判片面を基本とし、内容が多くなれば表裏面を利用し、さらにA4判の2つ折りとしていくことで、A5判片面の4倍の量が可能となる。生徒たちの文章表現力の高まりに伴って、A5判からA4判へと増やしていく。

#### 3) 生活ノートのシステムと全行書きについて

生活ノートはA5判のノートであり、「明日の予定」「家庭学習の記録」「生活日記」の3項目からなる。生

徒は帰りの学活で明日の予定を、帰宅してから生活日記を書き、翌朝に提出する。生活ノート係が提出者をチェックし、A担任に届ける。A担任は提出された生活ノートに目を通して、生活日記に対するコメントを書く。帰りの学活で係が提出された生活ノートを各自に返すシステムである。生活日記の欄は生活ノートの約半分のスペースを占めていて12行あるが、生徒には、生活日記への「全行書き」を要求している。そのため提出された生活ノートにはできるだけ返事はしっかり書こうと心がけている。サインや1行程度の簡単な返事ではなく、読んで担任が感じたことや考えたこと、アドバイスなどを数行にわたって書いている。全行埋まっていない場合には、空欄の行を線で囲ったり、「あと〇行！」などの言葉を書いたりすることで、全行書きへの注意も促している。

#### 4) 全行書きに対するA担任の考え

生活日記への全行書き(以下、生活ノート全行書き)の目的は、文章表現力を高めることである。文章表現力はトレーニングによって獲得できるので、学級開きの時に「生活ノート全行書きに挑戦しよう」と生徒たちに話すとともに、日々の授業での感想用紙等のプリントについても「与えられた行数を全行埋める」ことを生徒たちに要求している。文章表現力を育てる目的は以下の3点である。

- ①自分の思いや考えは、文章にしておかないと忘れられてしまう。そのため、その時々で自分の思いや考えを文章化し、自らを振り返る手立てとしたい。自らを振り返ることで自分の課題や成長を実感できるからである。
- ②自分の感情を客観化するためには、自分の感情を文章化して可視化することが必要である。曖昧模糊とした思いは文字にできない時もあるが、その感情にピッタリこなくても何とか言葉を与えておかないと、人は時にその感情に支配されてしまう恐れがある。言葉にすることで、「今、自分はこういう気持ちなんだ。」と確認することができる。この一連の過程は、自分の感情をコントロールするために非常に重要である。
- ③自分の思いや考えを文章にできるということは、その人間の発信力を高めることである。言葉にできれば、文章として発信することができる。自分の思いや考えを他の人に伝えることは、周りの人々と豊

かなつながりを築いていくために必要なことである。

### 5)掲載する生活ノートの選択とねらい

生活ノートを読みながら、本学級通信に紹介する生徒を選び、複数の場合には載せる順番を決める。選択の基準は、学級内に縦糸と横糸を張るといふA担任の学級経営方針に沿った内容のものである。A担任が目指している生徒や学級集団の姿を明確にし、そこに向かって生徒個々のベクトルを合わせていくための学級世論の形成を意識して選択する。成井(前掲)が指摘している支持的な学級風土の醸成を目指したのである。そのために、成果を出している生徒の心のあり方やものごとの考え方の基本、効果をあげているやり方などを意識的に取り上げ、生活ノートと関連させながら紹介する。また、紹介した内容に沿った具体的な行動が生活ノートに書かれてきたときには、その行動を価値づけながら積極的に紹介するようにしている。このような具体的な行動を紹介することで、生徒たちの行動のモデルになることを期待するとともに、山本・赤坂(前掲)が示唆しているように、A担任と生徒との信頼関係を維持し、横糸をより豊かなものにしていこうと考えている。そして、友をモデルとした行動をし、その良さを生活ノートに書いてくれば、これもまた積極的に紹介するようにしている。小坂・赤坂(前掲)が述べている子ども同士の信頼関係の構築という新たな横糸(生徒と生徒がつくる豊かなつながり)で織物モデルをより強固なものにしようと考えた。

### 6)掲載への配慮と保護者への期待

生活ノートの内容を学級通信に載せてもらいたくない時には、「載せないでください」と書くように生徒にお願いしてある。意思表示がない時には、通信に載ることを生徒が承知しているものとして扱っている。載せる回数については、各生徒、学期に1回を原則としている。同じような内容の時には、掲載回数が少ない生徒を優先して載せているが、すべての生徒が均等になるようには考えていない。通信の内容が制約を受けてしまう可能性があるからである。陰の声は、生徒に語りかけるように書いている。語りかけている相手は生徒たちだが、その後ろにいる保護者に届くことを意識して書いている。本学級通信の内容が家族団らんの場で話題にされたり、本学級通信の内容から親子の会話が生まれたりすることを期待している。

### 7)配付と読ませ方

本学級通信は朝の学活で全員に配付し、読み合わせをしている。A担任が読むこともあれば、掲載された生活ノートを書いた本人に読んでもらうこともある。読み合わせをする理由は2つある。

①生活ノートの書き方についてふれ、書き方についてのアドバイスをするためである。例えば、「楽しかった」という言葉をすぐには使わずに、なぜ楽しかったのか、どんなところが楽しかったのかをまずは書くようにし、その上で最後に「楽しかった」で結ぶようにする、などを話している。他の生徒の生活ノートの記述を一つのモデルとし、紹介した文章に即した形で話をするので、生徒は自分自身の生活ノートをどう書けばいいのかを知り、単なる事実のみのつまらない文章から自分が感じたことを中心にした文章が書けるようになっていくと考えている。

②文章ばかりの学級通信であるが、それゆえに文章を読む力を高めたいと考えている。高校入試を念頭に置いたとき、文字数の多い文章を面倒くさげらずに読もうとする姿勢は必要な力だとA担任は考えている。近年の入試問題は文字数が多く、問題を解く以前に文字数の多さを見て「戦意喪失」状態になってしまう可能性がある。そのため、日頃から文字ばかりの文章を読む習慣をつけることが必要である。なお、本学級通信は管理職と同僚教師にも配布している。

## 4. 学級通信の生活ノート関連モデル

これまで述べてきたように本学級通信は、個々の生徒が毎日書いて提出する生活ノートと深く関連している。生徒の生活ノートが主役の学級通信なので、生活ノートを書く習慣をつけるとともに、書く力をつけることが重要になる。生徒は「生活ノート全行書き(個人)」「提出された生活ノートへの担任のコメントを読む(個人とA担任との交流)」「本学級通信の読み合わせ(生徒間及び生徒とA担任との交流)」の3つの活動を毎日繰り返すことで、書く力をつけ、発信力を高めていく。A担任は、学級集団や生徒の状態をアセスメントし、状況に応じた課題を本学級通信や短学活で要求していく。A担任の発信に反応してきた生活ノートにコメントを返し、次の日の本学級通信で紹介していく。このように3つの活動が

スパイラル的に発展し高まっていくことで、目指している学級集団の育成や個々の生徒の姿に近づいていくことを目標としている(図1)。

### Ⅲ. 生活ノート連動型学級通信に対する質問紙調査

#### 1. 調査対象と調査方法

生徒・保護者・同僚教師に本学級通信に対する質問紙調査を実施した。生徒には、生活ノート全行書きと学級通信について自由記述で感想や意見を求めた。保護者と同僚職員には、本学級通信に対してそれぞれ10項目と7項目について4件法(当てはまる・やや当てはまる・あまり当てはまらない・当てはまらない)で回答を求めた上で、自由記述での感想や意見を求めた(表1)。

#### 2. 評価方法とフィードバック

保護者・同僚職員に対する質問項目は、項目ごとに集計した。自由記述については、できるだけ客観的に分析するために、A担任(第2筆者)と学年会の教員1名及び第1筆者とで協議して意味のある文章ごとに分解した。KJ法を参考にして整理し、カテゴリー化して分類した。

保護者アンケートの結果については、卒業式前日の本学級通信(No.243「1年間、ありがとうございました」)で報告した。

#### 3. 結果と考察

##### 1) 生徒アンケート(自由記述のみ)

34人中、26人から回答を得た。意味のある文章ごとに分解した結果、生活ノートについては51件、学級通信については33件の回答が得られた。内容的に

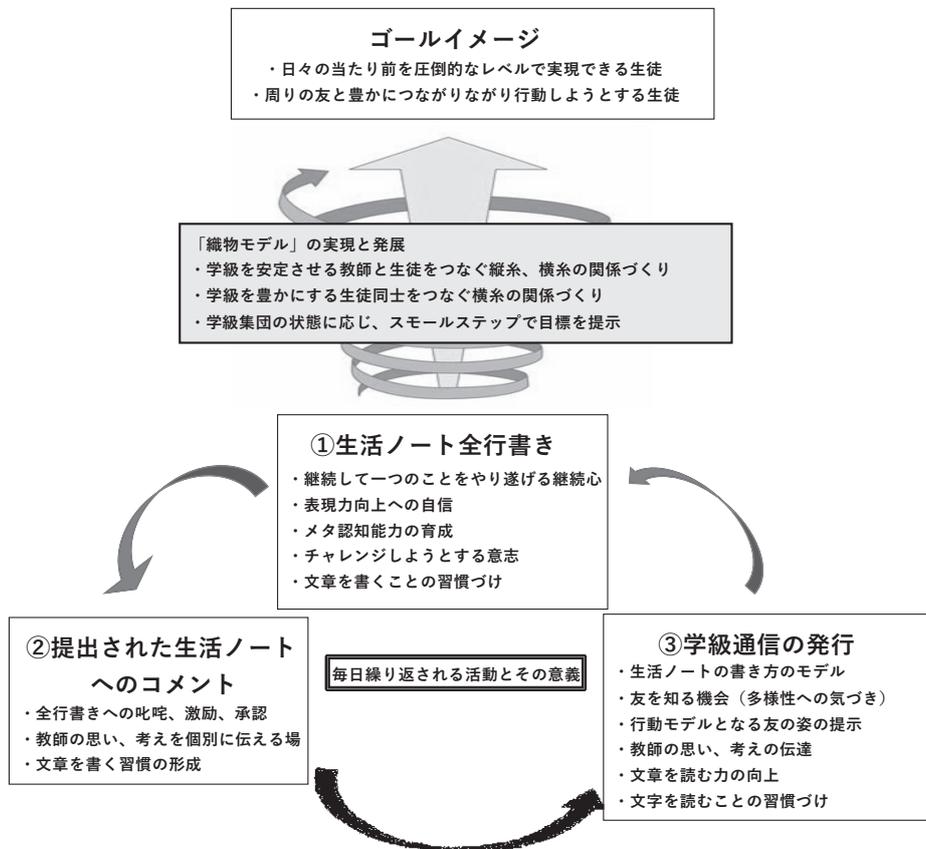


図1. 生活ノート連動型学級通信モデル

生活ノートについては11のカテゴリーに、学級通信については10のカテゴリーに分類された。

#### ①生活ノート全行書きについて(表2、図2参照)

生徒は、導入初期には書くネタが見つからず何を書いていかわからなかったり、全行埋めるだけの文章が書けなかったりなど、これまでの中学校生活2年間で生活ノートを書いてこなかったり、書いていたとしても数行で済ませてきた生徒たちにはとっては、大きな心理的抵抗感となっていた様子が読み取れた。しかし、生活ノート全行書きを書き続けることで苦手意識がうすれ、「自分自身の文章表現力の向上」「具体的な場面での効果」「具体的なスキルの向上」「継続することの大切さ」「周りを見る目の育成」など、自分自身の能力が高まっていることを感じている。具体的な場面での効果としては、公立高校前期選抜における志願理由書(自己推薦文)を書く場面や国語のテストでの記述問題、読書への興味、そして、生徒会長という立場で各種挨拶文を考えると役に立ったと答えている。向上した具体的なスキルとしては、自分自身を振り返る機会になった、伝える方法を身につけた、まとまりのある文章を書けるようになった、起承転結を意識して文章を読んだり書いたりするようになった、などがあがっている。そして、生活ノート全行書きによって身につけたこれらの力を実感しているからこそ、「書くことの意義の発見」や、これからも日記を書き続けていきたいという「将来への意欲」へとつながっているのだろう。また、生活ノートを通して「担任教

師とのつながり」を感じている生徒もいた。生活ノートが、A担任との交換日記のような役目を果たしていたのだろう。

#### ②学級通信について(表3、図3参照)

本学級通信が、学級の友のことを知ったり、自分と違う意見に触れたりする機会になっていたことが読み取れた。また、前述のように、生活ノート全行書きに抵抗を感じていた生徒たちがいたが、毎日学級通信を読むことで、友の文章の内容をモデルとしたり、友がこれだけの文章量を書いているのだから自分も頑張ろうと自らを鼓舞したりしていた様子も読み取れ、本学級通信が「子ども同士の信頼関係」の構築に貢献していたことが示唆された。また、日刊で発行される本学級通信を読み続けることで、文章を読むことへの抵抗がなくなったり、文章を書いた人の心情がわかるようになったりなど、自らの成長を感じている。学級のことや少し先のことを考えることの大切さを感じている生徒もいる。自分の文章が本学級通信に掲載されることが励みとなり、さらに頑張ろうと感じていた生徒もいる。

生徒の書いた生活ノートの内容をもとにしながら担任の願いを書くというスタイルが、A担任の願いを生徒に理解させ、学級として同じ方向に向かって行動していくための「支持的な学級風土の醸成」に寄与していたことも示唆された。また、本学級通信が親子の会話の架け橋となって、A担任の方針や学級・学校の様子を知ってもらうとともに、我が子の学校での様子や考えを知ってもらう機会となってい

表1 保護者・同僚職員へのアンケート質問項目

保護者アンケートの質問項目	同僚職員アンケート質問項目
①学級担任の願いや考えがわかる	①学級担任の願いや考えがわかる
②学級で起こっていることがわかる	②学級で起こっていることがわかる
③学級の成長がわかる	③学級の成長がわかる
④学級の課題がわかる	④学級の課題がわかる
⑤担任が子どもに伝えたいことがわかる	⑤担任が子どもに伝えたいことがわかる
⑥担任の子どもへの励ましが感じられる	⑥担任の子どもへの励ましが感じられる
⑦内容に満足している	⑦内容について3Aの生徒に話をすることがある(具体的な内容については自由記述欄に)
⑧文章は読みやすい	
⑨必ず読んでいます	
⑩内容について子どもと話をすることがある	

ることも示され、「保護者との連携」の土台づくりに寄与していることも示唆された。

## 2)保護者アンケート(図4、表4参照)

24人から回答を得た。自由記述については、意味のある文章ごとに分解した結果63件の回答が得られた。それらをKJ法を参考にして整理し、18カテゴリーに分類された。

多くの質問項目について、ポジティブな回答が

85%と超えていたが、「読みやすい」「必ず読む」「親子で会話する」の3項目が85%を超えなかった。また、「学級の課題がわかる」については、「ややあてはまる」の方が「あてはまる」より多かった。自由記述(図5)では、一番多かった内容は、子どもの「文章表現力がついた」であった。生活ノートを読むことを子どもから許可されていた保護者は多くはないと思われる。「生活ノートの先生からのアドバイスなど(こっ

表2 生徒の「生活ノート全行書き」についての自由記述

意味カテゴリー	内容	件数と割合
1. 全行書きへの抵抗	いきなり生活ノート全行書きを要求された時はとても大変で嫌だった。	23.5% (12件)
2. 苦手意識がなくなった	長い文章を書いたり、読んだりするのは苦手だったけど、生活ノート全行書きをするようになってから慣れてきて、いつの間にか苦手じゃなくなった。	19.6% (10件)
3. 具体的なスキルの向上	自分の言いたいことがわかりやすく伝わる方法を身につけることができるようになり、文章を書くときに、工夫をすることができるようになった。	17.6% (9件)
4. 具体的な場面での効果	テストなどで文字数などが指定されているものを、すぐに思いついて書けたので、書く力は毎日やっていたの、確実に上がりました。	15.7% (8件)
5. 文章表現力の向上	文章を書くのがとても苦手だったけど、おかげで文章力が上がったと思う。	7.8% (4件)
6. 継続することの大切さ	続けることの大切さを生活ノート全行書きで学びました。	6.1% (2件)
7. 自分の思いを表せる	その時の気持ちなどを表すことがなかった自分が、毎日しっかり書いて自分の思いなどを表せるようになってよかった。	6.1% (2件)
8. 周りを見る目の育成	生活ノートのネタを探すために、いろいろなところに目が行くようになった。	3.0% (1件)
9. 書くことの意義の発見	生活のことなんて、最初は書いても仕方がないことだと思っていましたが、日々生活ノートを書いていくと、読み返したときに達成感と日常で起こることは意外にもおもしろいことが起こっていることを感じられました。	3.0% (1件)
10. 将来への意欲	高校でもノートなどに1日を振り返るような日記を作り、書いていきたいと思いました。	3.0% (1件)
11. 担任教師とのつながり	「先生とのやりとりがしっかりできて、相談とかがしやすくなってよかった。	3.0% (1件)

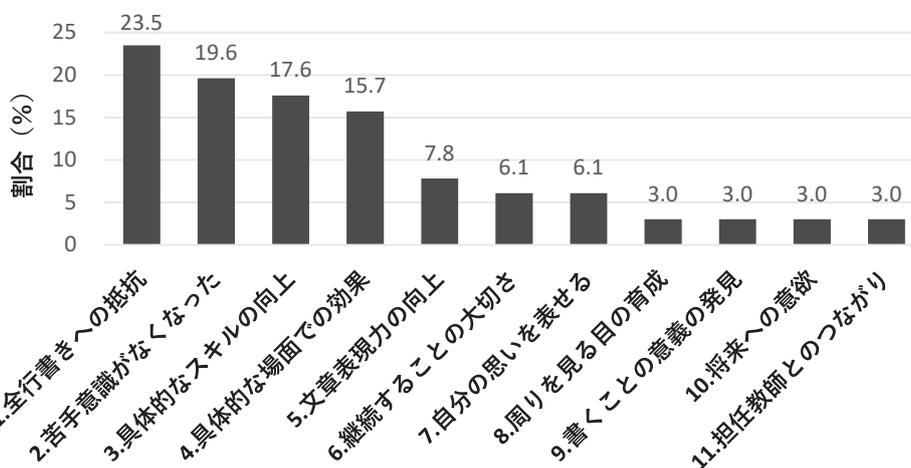


図2. 生徒「生活ノート全行書き」自由記述のまとめ

表3 生徒の「学級通信」についての自由記述

意味カテゴリー	内容	件数と割合
1. 仲間のことを知る機会	どういう人なのか知れていない人も「ひとりだち」でわかるようになったり、 どんどんクラスのことをわかるようになってきたのがうれしかった。	27.3% (9件)
2. 自らの成長を感じる	クラスのことを考えたり、この先のことを考えることの大切さを知った。	21.2% (7件)
3. 自分と違う意見にふれる機会	自分の中だけだと生活ノートは狭い世界になりますが、「ひとりだち」の内容は、 一緒に生活して過ごすクラスメイトの考え、思い、体験のおもしろさが、 自分のもつとらえ方とは別角度のとらえ方を知れておもしろかった。	15.2% (5件)
4. 生活ノートに書く内容のモデルとなる	みんながどんな内容を書いているのかを知ることができたのでよかった。	9.1% (3件)
5. 内容がおもしろい	おもしろいものが書いてあっておもしろかった。	6.1% (2件)
6. 担任教師の願いがわかる	先生の意見があったりすると、「あ〜、なるほど…」とったりしました。	6.1% (2件)
7. 同じ方向に向かえた	考えを共有することにより、クラスで一緒になってやる時には、その考えに 沿ってできていた。	6.1% (2件)
8. 自分の文章が載るとうれい	自分のものが載っていたりすると、書いてよかったと思えた。	3.0% (1件)
9. 仲間への感謝	生活ノートをたくさん書くきっかけをつくってくれた人には、すごく感謝 しています。	3.0% (1件)
10. 親との会話のきっかけ	コロナで参観日などがなくなって、親が学校の様子がわからず話せなかった けど、学級通信で学校の様子などがわかり、親子の会話が増えてよかった。	3.0% (1件)

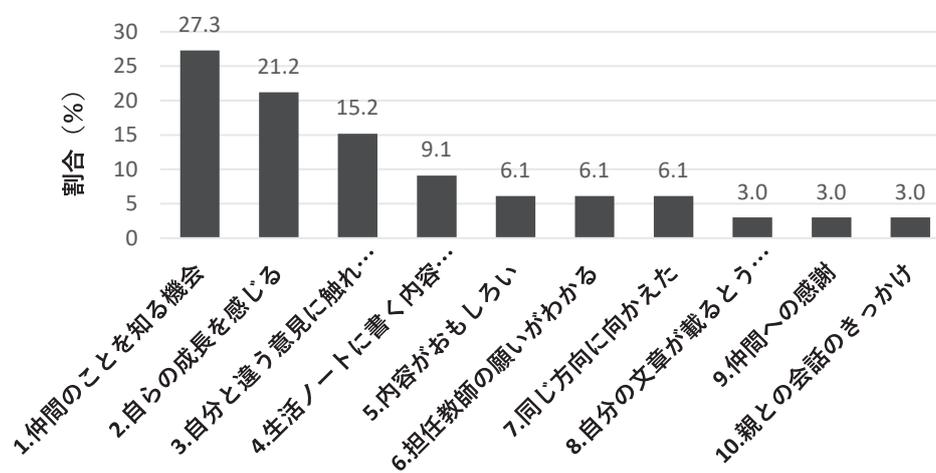


図3. 生徒「学級通信」自由記述のまとめ

そり)見せていただきました。」という回答から、子どもに隠れて盗み読みしている保護者がいたり、学級通信に掲載された子どもの文章を子どもに教えてもらって読んだり、生活ノートにまつわる家庭での子どもの行動観察からの意見であろう。「生徒の様子がわかる」「教師の思いがわかる」「教師と生徒との関係がわかる」「子どもと話題になった」「我が子の成長を感じる」「学校のことがわかる」「担任教師への信頼」などの内容は、本学級通信を通した「保護者との連携」につながるものであろう。また、「学級通信の構成の良さ」「生活ノートへのコメント」「配付の仕方」など、学級通信を中心としたA担任の学級経営に対する肯定的な内容である。学級開きの時にA担任がお願いした、日刊で学級通信を発行するので毎日読んでほしい、ということにも触れた内容をもあった。子どもの姿に触発されて、学級通信に関するアンケートの自由記述全行書きに挑戦した保護者の方々もおられた。

ただ、本学級通信の内容と自分の子どもの状況との間のギャップに苦しんでいたという内容があった。質問項目のネガティブな回答と連動していると思われるが、生活ノートが毎日提出できなかつたり、本学級通信に紹介されている姿と自分の子どもの姿が重ならなかつたりと、本学級通信によって学級や他の子どもたちの姿を知ることによって他の生徒と比較してしまい、我が子の成長を感じるができなかつた

ようである。

### 3)同僚教師アンケート(図6、表5参照)

15人から回答を得た。自由記述については、意味のある文章ごとに分解した結果56件の回答が得られた。それらをKJ法を参考にして整理し、13カテゴリーに分類された。

質問項目では、「生徒に話をした」以外の項目で、ポジティブな回答が100%であった。発行した本学級通信は、管理職を始めとして教務主任、養護教諭、事務職員、庁務職員、司書など学校運営に関わる先生方と教科担任、学年職員など学級に関わっていただいている先生方、そしてA担任の学級経営に関心を持ってくださった先生方など35名の先生方に配布していたが、アンケートに答えていただけたのは15人と回収率40%であった。そのため、担任の学級経営に興味をもって学級通信を読んでもらっていた先生方がアンケートに答えていると考えられる。「生徒に話をした」については、教科担任や学年職員でなければ、話をしたくても接点がなかったということが考えられる。

自由記述(図7)では、A担任の学級通信のスタイルである「生徒主体の構成」についての内容と、学級通信の中で伝えてきた担任の姿勢を「今後の参考にしたい」という内容が一番多く寄せられた。また、「生徒の様子がわかる」「生徒を知る機会」「担任教師の考えが伝わってくる」からこそ、教科担任の中に

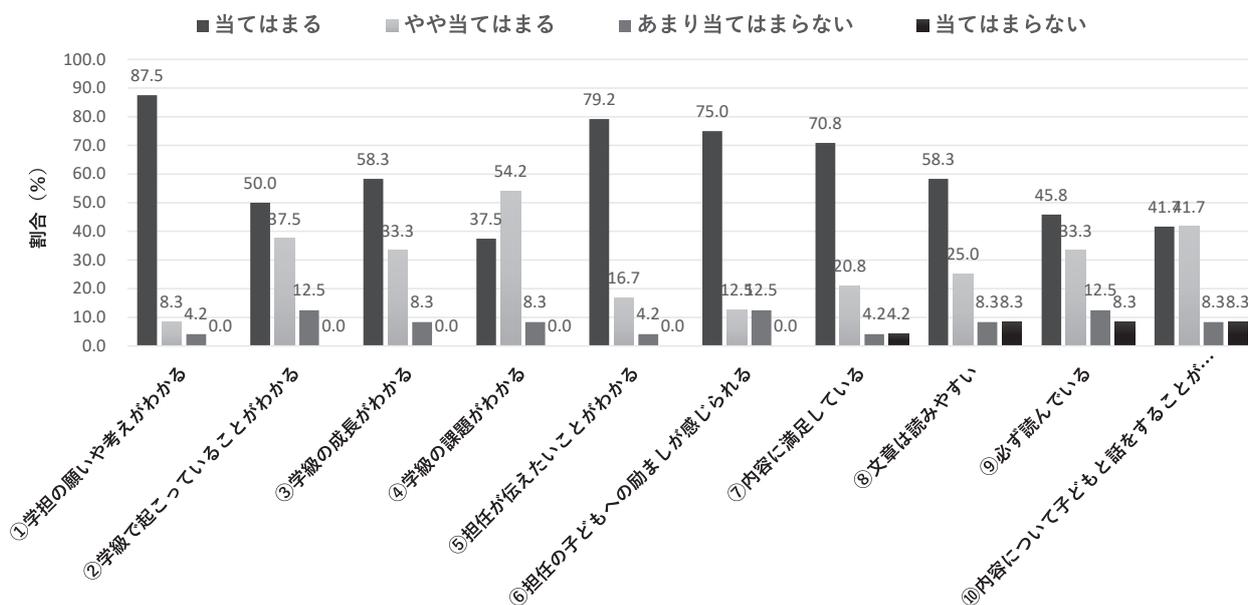


図4. 保護者アンケート結果

表4 保護者の自由記述のまとめ(全回答63件)

意味カテゴリー	内容	件数と割合
1. 文章表現力がついた	読めないような文字で数行しか書けなかった娘が、毎日「今日は何を書こう…」とノートを広げ、いつの間にか全行書きができるようになって驚きました。	14.3% (9件)
2. おもしろかった	毎日読んでるうちに、「今日のこれは〇〇のやつ?」とか「自分の子どものものかな?」など、楽しみがどんどん増えました。	9.5% (6件)
3. 生徒の様子がわかる	今学校で何があって、子どもたちがどんなことを考えているのか…とても楽しく、毎回読ませていただいています。	7.9% (5件)
4. 教師の思いがわかる	子どもたちに問いかけることで、子どもたちに考えさせ、どう解決していくのか導いてくれていると感じます。	7.9% (5件)
5. 教師と生徒との関係がわかる	子どもたちと先生との関係がうかがえるすばらしい通信だと思いました。	7.9% (5件)
6. 子どもと話題になった	日々、「今日のひとりだち」から始まる親子でも会話の時間をもつことができたおかげで、日々の学校での様子、お友達の名前、自分の子どもの考え方、思うことなど身近に感じることができました。	7.9% (5件)
7. 我が子の成長を感じる	我が家の娘は、自分の将来や今後について考えることができ、目標を見つけることができたと思います。	6.3% (4件)
8. 学級通信の構成の良さ	生徒に全行書きを求めるだけでなく、それに対して1人1人にコメントを書き、ひとりだちを発行する。これを毎日続ける先生の姿勢が子どもたちに伝わって、最初だけで終わることなく続いていったと思います。	4.8% (3件)
9. 生活ノートへのコメント	サインだけの生活記録ではやる気も起きず、毎日が続かなかったでしょう。	4.8% (3件)
10. 学校のことがわかる	中学生になると、学校のことをなかなか話さなくなり、今年はコロナ禍でも、学校・クラス・子どもの様子がわかり、本当にありがたく思いました。	4.8% (3件)
11. ファイリングしてあります	時々、「私のお便りに載ってる」と見せてくれると、私の宝物として私のクリアファイルにしっかりと保存してあります。	4.8% (3件)
12. 保護者も行動	アンケートの全行書きを目指しましたが…残念ながら到達することができませんでした…。娘にモヤモヤする…と言われてしまいました。	4.8% (3件)
13. 保護者の思い	インプットばかりの子どもたちが、アウトプットの力を養うことができている、うらやましく思います。	3.2% (2件)
14. 課題	クラスの子たちの成長、A組全体の向上心、支え合いなど、さまざまなことが書かれている中で、成長が感じられない息子の様子に、ひとりだちを読むことで不安を感じたこと、読むのがつらく感じたことが2学期の頃からありました。	3.2% (2件)
15. 疑問	(陰の声)という書き方も気になりました。	3.2% (2件)
16. 担任教師への信頼	学級の様子がわかり、先生の考えがわかることで先生への信頼感がわきました。	1.6% (1件)
17. 配付の仕方	ただ配付ではなく、朝の時間に皆で読まれていると聞きました。それも心に響くことだと思います。	1.6% (1件)
18. 毎日読めなかった	日々の忙しさにかまけて毎日読むことはできませんでした。	1.6% (1件)

は授業の中で学級通信の内容に触れた話をするなど、「生徒へのはたらきかけ」を行っていたこともわかった。

ただ、いくつかの「気になった」という内容もあった。まず、「建前ばかりの上手な言葉は苦手です」「他のクラスの生徒が読んだら気を悪くするかもしれない」「他の職員が読んだら身につまされる思いかな」などの指摘である。A担任は、「あの時のあれがあったから、今の自分や学級があるんだ」と、あとになって思えるような内容になるように意識して学級通信を編集している。年度末にこんな自分や学級になりたい、というゴールイメージに向かって日々歩

んでいける「ストーリー性のある指導」を行うための具体的なアイテムとしての学級通信の位置づけである。そのため、他の先生方から見ると、厳しく突き放したような物言いになっていることもあったのかもしれない。しかし、学級集団のレベル向上と生徒の成長のためには、学級集団の枠組みをつくる縦糸を張ることは必要なことである。そしてだからこそ、日刊で本学級通信を発行して生徒や保護者に願いを伝え続け、担任の姿勢を理解していただこうとしているのである。

また、保護者アンケートの自由記述の中に、「子

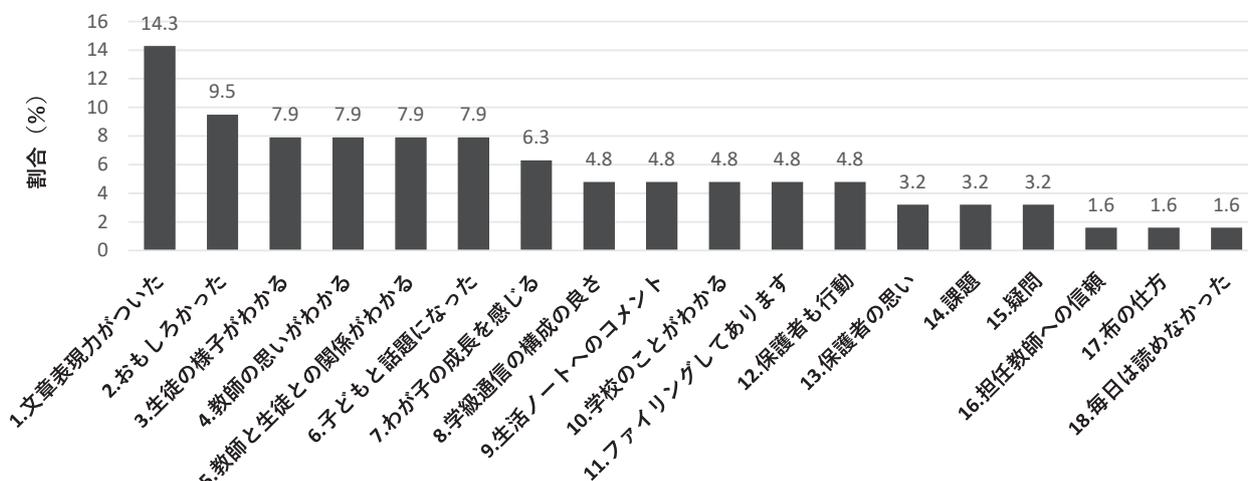


図5. 保護者自由記述のまとめ

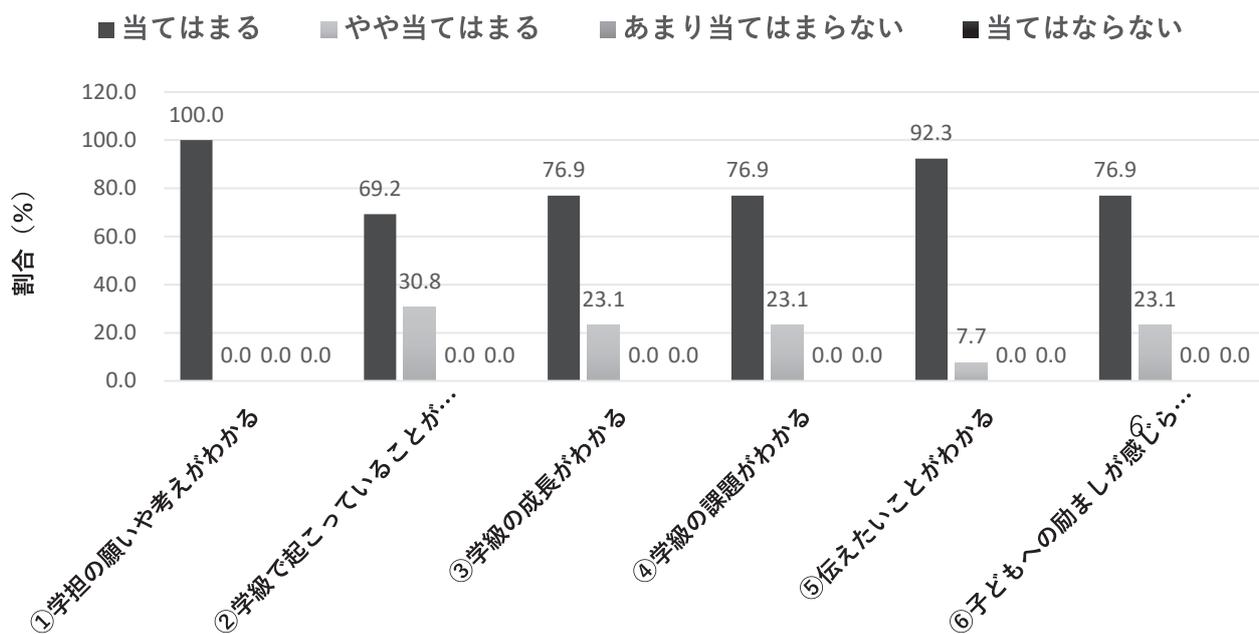


図6. 同僚職員アンケートの結果

表5 同僚職員の自由記述のまとめ(全回答56件)

意味カテゴリー	内容	件数と割合
1. 生徒主体の構成	生徒が主体・主役であるからこそ、生徒は読み、友だちの考えや思い、自分の考えや思いにふれられ、そこから自分はどうか考えるのか、どうしていくのかを自分自身で見つけていくことになるかと思えます。	14.3% (8件)
2. 今後の参考にしたい	時々紹介されていた人間関係づくりの活動は、他の学級、他の学年にも広げていただきたいと思えます。	14.3% (8件)
3. 生徒の様子がわかる	A組の生徒は、こんなことを考えているのだな、こんなふう成長しているのだな、というのが具体的に感じられました。	12.5% (7件)
4. 生徒へのはたらきかけ	ただ「ひとりだちに～について書いてあったな」ではなく、自分にとっての思いや考えを(授業中に、生徒たちに)言わせてもらうこともありました。	12.5% (7件)
5. 担任教師の考えが伝わっている	生活ノートを軸に、どのような学級集団を目指していくのか、どのような姿(個人→集団)を願うのかが、ビシビシ伝わってきました。	8.9% (5件)
6. 発行への慰労	毎日発行するということがまずすごい。私は1日おきくらいに出したことはありますが、写真をつけておしまい…ということがしょっちゅうでしたので。	8.9% (5件)
7. 楽しく読ませてもらった	1年間、楽しく読ませていただきました。ありがとうございます。	7.1% (4件)
8. 気になった	純粋な心を持っていれば素直に受け止めてくれそうですが、書かれた言葉にはトゲも痛みもあります。建前ばかりの上手な言葉は苦手です。	7.1% (4件)
9. 生徒を知る機会	生徒の生活ノートを載せてくださって、生徒が考えていること、思っていることを知る機会となりました。	3.6% (2件)
10. 担任教師の姿勢	最終号が245号！登校日数が189日ですので…びっくりです。吉岡先生のクラスへの愛を感じます。	3.6% (2件)
11. 今後の展望	学年担任制の中で、どんな形で発信してくださるのかわかりませんが、これからの刺激になる発信を続けていただきたいです。	3.6% (2件)
12. 伝え続けることの効果	伝え続けることも、地味ですが効果はあったと思えます。	1.8% (1件)
13. 掲載される意識	子どもも自分の書いた文章がおたよりに掲載される意識が持てたとと思えます。	1.8% (1件)

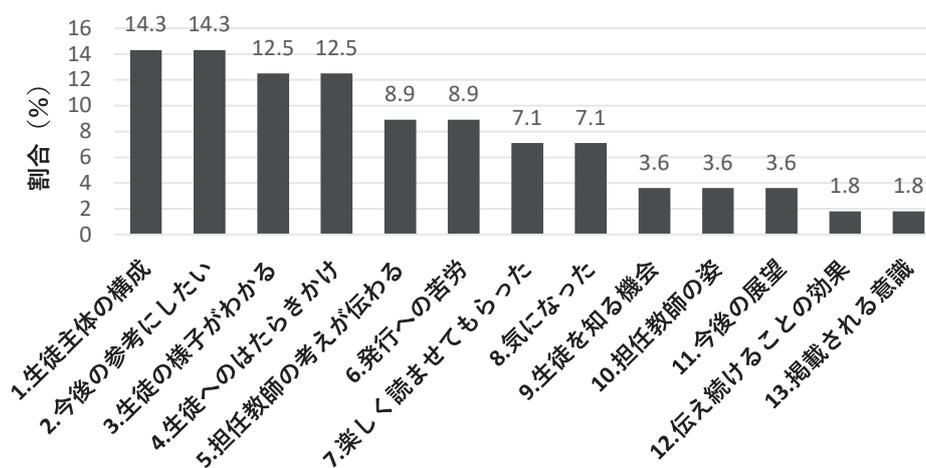


図7. 同僚職員自由記述のまとめ

どもたちが学び、考える大きな糧となったのは、15歳という大人でも子どもでもない多感な年ごろ、受験生という環境にある子どもたちへ、吉岡先生が中学校で学ぶ教科を越えた人間力を高めるためのお話を、生活ノートへのレスポンスという形で、途切れることなく「毎日」伝えてくださったことです。」という意見があった。教師自身が学び続けること、そして伝え続けることの重要性を再認識させられた。

「掲載される意識」についての内容もあった。A担任は、本学級通信を教科担任を始めとして多くの先生方に配布することで、自らの思いや考えと学級経営に関する具体的な方法を公開してきた。そして、その結果として上記のような指摘をしていただくことで、鈴木(前掲)が挙げている「教師としての資質向上」につながると考えている。

#### IV. 全体考察

A担任が発行してきた生徒の生活ノートと連動させた本学級通信は、織物モデルの発展的構築と生徒同士のつながりという新たな横糸をつむぎ、より豊かに学級の成員がつながりあう学級集団を醸成するとともに、先行研究で指摘されている「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」「子ども同士の信頼関係」を構築するツールとして機能していたことが示唆された。

同僚職員の自由記述の中に、「今年度はコロナ禍で、話はするな、近寄るなど、そうでなくても中学生のコミュニケーション不足は否めない。そこに書くこと、そして、それを拡散することで、クラスみんなの共有情報として考えさせる。」ことの良さにふれた意見があった。生活ノートと学級通信を連動させた情報の発信は、お互いに相対して語り合うコミュニケーションの方法とともに、重要なコミュニケーションの方法である、との指摘であろう。そして、本学級通信が実際の会話へとつながるきっかけとなっていくのである。宮田(2015)<sup>12)</sup>は、最も大切にしているのは生徒の日記の引用である、として以下のように述べている。「まさにコミュニケーションのきっかけであり、今度は実際の会話へとつながっていくのである。この繰り返しにより、話すことが苦手な生徒も文章による自己表現によって、周りの仲間へ自分の思いを伝えやすくなり、ふだん静かな

生徒に対して周りの生徒たちも話しかけるきっかけとなる。さらに、日記に仲間の良いところを褒めるように書く指導をすると、自分のことについて仲間が書いてくれた学級通信を読むことで、もっといろいろな出来事を日記に書こうと努力するようになるのである。」

同僚職員の自由記述には、「生活ノート全行書きは、教員側としては書く力、自分の考えをまとめ表現する力を身につけさせるためにも生徒に要求したいところですが、なかなかうまくいきません。」「どんな内容を書くかと全行書くということに関し、生徒たちにどのような働きかけをしたか教えていただければ嬉しいです。」といった生活ノートへの取り組みませ方に対する悩みが寄せられていた。保護者アンケートの自由記述にあった「すごいと感じるのは、子どもたちの生活ノートに対し、毎日コメントを書いてくださる吉岡先生です。」「サインで終わるだけの生活ノートでは子どもたちのやる気も起きず、毎日は続かなかったでしょう。」からわかるように、日々提出される生活ノートに教師がどう対面するのか、という点と、宮田(前掲)が指摘しているように、提出された生活ノートの内容を学級内にどのように広げていくか、という点の2点が重要になると思われる。

#### V. 今後の展望

近年、中学校において学年担任制の導入が話題になっている。学年担任制とは、学年を構成する全職員で学年すべての生徒を担当するというシステムである。各学級の窓口となる主担当と呼ばれる職員は存在するが、あくまでもその学級の窓口となる存在としての位置づけである。その学級の保護者や生徒が何かの相談をしたいと思った時、だれに相談したらいいか迷ってしまう場合には主担当に連絡してください、ということである。つまり、その学級の生徒や学級経営に対して責任をもつ存在としての学級担任とは異なる存在である。そのため主担当の職員がどこまでその学級に入り込み、どこまでその学級の経営に責任をもつのかについてははっきりしていない面が多い。

岸田(2021)<sup>13)</sup>は、学級集団づくりは感情の交流を基本として、子どもと子どもをつなげるための意図的な教育の営みであるとして上で、「同じように先

生とBさんの関係が変化すると学級の全体の雰囲気が変わるかもしれない。したがって、一人一人の子どもと担任である自分がどのような関係でつながっているのかを客観的に把握する必要がある。」と指摘し、田上の学級システムを紹介している。

田上を代表とする学級システムプログラム研究プロジェクトチーム(2020)<sup>14)</sup>は、「学級は、担任と学級の子どもたちが相互に影響しあっているシステムである。」とし、「私たちは重要な点を見逃していないだろうか。学校で起こっている問題を解決しようと、児童生徒という木は見ているが、学級システムという森を見のがしているのかもしれない。」と指摘している。

現在のA担任の勤務する中学校は学年担任制である(本事例が実践された年の3学年は学級担任制であった)。ある学級の主担当ではあるが、6学級を1週間単位でまわって、その週に担当となった学級の生活ノートを読み、朝と帰りの学活で話をしている。そのためストーリー性のある指導ができにくい。なぜならば、1年間を通して決まった学級の生活の様子を見ることができないうえ、1年間を通して特定の生徒の生活ノートを読むこともできないからである。その学級やそこに属する生徒たちにどのような力をつけられるのか、そのためにどのような働きかけをし、どのように高めていくのか、というストーリーがつかれないのである。同僚職員アンケートの「気になること」で指摘されていたように、A担任は学級や生徒の成長のための縦糸を張るためには、時には厳しいことも要求してきている。それを保護者に理解していただけるのは、生活ノートと連動した本学級通信を毎日発行したからこそであると考えられる。

学年担任制のもとでは、自分がその週に入った学級に向けての学級通信は出しにくい。なぜなら、願いを伝えても十分に見届けられないからである。前述した理想教育財団の調査に見られるように、8割近くの教師がその意義を認めている学級通信であるが、中学校における学級通信発行の実践は、今後どのような変遷をたどっていくのか。特に学年担任制システムを取り入れている中学校では、学級通信はなくなってしまうかもしれない。最も最低1年間は特定の学級の担任として生徒とかかわり、学級経営をする学級担任制がなくなれば、学級経営や学級集

団づくりそのものの基本的な概念が変容することになるのではないだろうか。

## 文献・参考

- 1) 公益財団法人理想教育財団, 「学校における各種通信の実態と教育における調査研究」(2018).
- 2) 鈴木健二, 「学級経営における学級通信の役割」愛知教育大学教育創造開発機構紀要第2巻 p.103-111(2012).
- 3) 成井信之, 「望ましい学級経営の具現化につながる学級通信の一考察」奈良県立教育研究所研究紀要(2011).
- 4) 山本宏幸・赤坂真二, 「生徒指導困難校における教師と生徒の信頼関係の構築に関する事例的研究」上越教育大学教職大学院研究紀要第3巻(2016).
- 5) 小坂篤史・赤坂真二, 「学級通信を介した友人関係の深まりに関する事例的研究～児童の良さを伝える学級通信に着目して」上越教育大学教職大学院研究紀要第5巻(2018).
- 6) 吉川成司, 「コミュニティ・ネットワークとしての学級通信～開かれた学級づくりのために～」創価大学教育学部論集第55号, p.99-110(2004).
- 7) 佐藤正寿, 「学級通信の発行に関する教師の意識」日本学級経営学会誌第2巻 p.9-12(2020).
- 8) 小倉真, 「学級づくりにおける『教師理解(教師の語りかけ)』の果たす役割:学級通信と学級づくりとのかかわりについて」学級経営研究第14巻, p.75-86(1989).
- 9) 吉岡三智子, 「生徒の相互理解を進める手立てとしての学級通信の可能性:個を結び、一体感のある学級づくりをめざして」教育実践高度化専攻成果報告書抄録集第5巻, p.97-102(2015).
- 10) 寺本英雄, 「子供と学級通信の掲載内容及び掲載方法の関係についての研究～子供の自尊感情の変動性と学級担任の主観で捉える子供との関連を通して～」東京都教職員研修センター大学院派遣研修・教職大学院派遣研修報告書平成22年度修了分(2010).
- 11) 野中信行・横藤雅人, 「必ずクラスがまとまる教師の成功術!」学陽書房(2011).
- 12) 宮田明, 「言語活動の充実に向けた新メディア学級通信づくりとICT利活用によるPTAへの発信」一般社団法人日本教育情報化振興会ICT夢コンテスト表彰事例アーカイブス2016年度(2015).
- 13) 岸田幸弘, 「今の時代だからこそ、学級集団づくりを」信濃教育第1614号巻頭提言, 信濃教育会(2021).
- 14) 田上不二夫・岸田幸弘・大澤靖彦・中村恵子・丹野宏昭, (学級システムプログラム研究プロジェクトチーム)「不登校の発生を防ぐ学級システムプログラムの理論とやり方」(2020).